19

蘭門五哲の書幅

○小曽戸　洋[1]・町[2]　泉寿郎

森鷗外（文久二～大正十一年）の歴史小説『伊沢蘭軒』その百九十四に次のような記述がある。

「わたくしは此に第（しばら）く当時の所謂『蘭門の五哲』を挙げる。即ち渋江抽斎、森枳園、岡西玄亭、清川玄道、山田椿庭である。蘭軒の歿後に、榛軒は抽斎、玄亭、椿庭の詩箋、枳園の便面、玄道の短冊を一幅に装ひ成したことがある。此幅は近年に至るまで徳さんの所にあつたが、今其所在を知らない」。

以下、本口演では、森鷗外が『伊沢蘭軒』執筆当時（大正五～六年）、その所在を知らなかったという「蘭門五哲の書幅」について報告する。

本書幅は日本大学医学部図書館（富士川文庫）に現存している。富士川游（慶応一～昭和十五年）所蔵の古医書の多くは、生前、京都帝国大学、ついで慶応義塾大学に寄贈されたが、没後に残された旧蔵古医書と古医学資料（掛軸、書簡、写真等）は富士川孝雄氏から日本大学医学部に寄贈された（日本大学医学部図書館『古医学資料目録』昭和五十九年）。本書幅はそのうちに含まれていたものである。富士川游が伊沢徳からいかなる経緯によって本品を取得したか、また、大正五年頃、富士川游が本品をすでに入手していたか否かについては、森鷗外と富士川游の関係（富士川英郎「森鷗外と富士川游」『鷗外』四七号〈平成二年〉参照）をうかがう上でも興味深いところであるが、目下詳かにできない。

①**渋江抽斎**（文化二～安政五年）

渋江抽斎（全善、道純）は弘前藩医。「餘芳画院／嘉酉善」と篆書体で書かれている。「嘉酉」は嘉永二年、抽斎四十三歳時の筆である。

②**清川玄道**（寛政四～安政六年）

この玄道は世医清川氏三代玄道の愷（吉人、靄墩）で、岡藩医。「伊沢良安道斎合季之日、壁上掛先師蘭軒先生病中示二児之作、対之不能無懐旧之感、因次其礎以祝時主

翁榛軒君在褥兼慰病思／觴政当筵笑且論音容喜気満堂存、庭筠早已呈春意、他日須知龍育孫／老生愷拝草」とある。伊沢良安とは伊沢榛軒の養嗣子棠軒のこと。「合巹」とは婚礼の意。よって嘉永五年の揮毫であることがわかる。

③岡西玄亭（？～安政三年）

岡西玄亭（徳瑛、魯直）は渋江抽斎の先妻徳の実兄。福山藩医。「新緑青葱裡、紫藤花正妍、幽人閑着座、把酒更陶然／紫藤花下隅成　瑛玄亭」とある。揮毫年不詳。

④山田椿庭（文化五～明治十四年）

山田椿庭（昌栄、業広）は高崎藩医。維新後、初代温知社社首となった。楷書で「孫真人伝龍宮仙方三十首、出酉陽雑俎列仙伝等、然新旧唐書本伝不載之、後人因為妄誕无稽之言、攷千金翼服水篇云武徳中龍齋此一巻服水経授余乃披翫不捨昼夜、拠此言則仙方三十首、雖似不可信亦不為無所本、因記以備資攷、椿庭業広識」とある。揮毫年不詳。

⑤森枳園（文化四年～明治十八年）

森枳園（養竹、立之）は福山藩医。維新後は文部省や大蔵省印刷局に出仕。同僚の中で最も長寿を保った。扇面に「一刀圭榛軒先生嘗視余猶弟、余亦視先生猶兄、□相陽游歴之間、毎通信必有砭鑱之文、今尚蔵之、萬延元年八月五日送其後人伊沢棠軒信淳陪従／君駕往于福山忽追想往事因餞以謹慎二字遂賦得小詩似之／人情□□利於刃、矧在異郷如在陣、臨別贈君唯二字、勿忘言行謹兼慎／華他術人森立之養竹醒公一字磊斎五十五歳書立之立夫」とある。万延元年、森枳園五十五歳時の揮毫。

森鷗外はこの書幅を、蘭軒没後、榛軒が装潢せしめたものといっているが、森枳園の扇面は万延元年の揮毫で、榛軒はすでに嘉永五年に没しているから、これは当たらないであろう。装潢は伊沢柏軒か棠軒あたりの所為かと推定されるが、ともあれ、本品は伊沢家を中心とする幕末考証医学者の遺物として史的価値を有するものといえよう。

（1）北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）
（2）二松学舎大学国文学研究科／北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）